

嶋村 克 (気象庁)
 浅野 正二 (気象庁)
 榎田 武彦 (東京理科大学)
 安成 哲三 (筑波大学)
 山本 晋 (公害資源研究所)

余田 成男 (京都大学)

6. その他 (話題)

- 1) 韓国の気象学会から非公式に交流希望の意向打診があった。 (理事長)
 今後交流を活発にする方向で、対処したい。

講演企画委員会からのお知らせ——アンケートへのご協力お願い

気象学会の大会については、近年の研究分野の多様化と講演数の増加に対応するため、以下のような改革が加えられてきました。

ポスター・セッションの導入 (1987春～)
 スペシャル・セッションの導入 (1988秋～)
 口頭発表の新しい方式の試行 (1989春～)

しかし、現行の方法にも問題点が残っていると思います。そこで、今後の講演企画の参考とするため、大会の

あり方について広く会員各位のご意見を伺いたいと思います。つきましては、号末のアンケート用紙にご記入の上、下記いずれかの方法でお届け下さい。

1. 春季大会会場受付に設けた箱に投入
2. 5月31日までに下記あて郵送

〒305 茨城県つくば市長峰 1-1

気象研究所 予報研究部内
 講演企画委員会 (藤部文昭)

編集後記: この編集後記執筆時点 (3月27日) で既に上野の桜は3分咲きとの新聞報道です。東京の開花は3月20日で平年より10日早く、昭和41年と並ぶ開花最早年となったそうです。また、3月15日高知・宇和島で開花し最早年であったのを初め、16日延岡・日田・三宅島等で最早の開花となるなど、報告された54気象官署中21官署で最早開花となったとのこと (3月27日現在)。大暖冬のためですが、またぞろ異常気象論議が盛んです。

異常気象と言えば炭酸ガス等の温室効果ガスによる地球温暖化にしても、オゾンホール問題にしても、炭酸ガスの場合はハワイ島における炭酸ガス観測、またオゾンホールではドブソン分光光度計やオゾンゾンデ観測等、長年にわたる地味な観測が最深部の基礎をなしていることに感動します。なかでも、1966年から日本により昭和基地で開始された南極大陸唯一の定期的オゾンゾンデによる垂直分布観測から、南極オゾンの減少が100 mb 付近を中心に下部成層圏で起こっていることが判り、これ

が原因究明に役立っていると聞くと、地道な基礎観測の大切さを思い知らされます。

重要な点は、これらの観測が温室効果やオゾンホールを意識して行われてきたのではないことです。これは、その時点で効果が期待されるものみに投資される姿勢に終始すれば、人類の絶滅要因を早くから察知して、人類を危機から救うことはできないことをしめす感動的な事実です。

昨今感ずるのは、高度情報化社会への対応に追われて、既存データのプロセッシング機能を向上さえすればそれでよいという風潮 (端的には観測は予報のためにのみあるという考え方) の恐ろしさです。

「天気」の編集にあたってとしても「気象学 (広く地球物理学) の原点が、永久に観測にあること」を銘記していきたいと思います。この点にご賛同される「天気」読者からの「天気」紙上の企画についてのご提案をお待ちしています。 (嶋村)